様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年 6 月 1 日現在

機関番号：14601
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2008～2010
課題番号：20720131
研究課題名（和文）　主観化・間主観化および言語の解釈的用法から見た文法化の普遍性について
研究課題名（英文）　On the Universality of Grammaticalization, (Inter)subjectification and Interpretive Uses of Language
研究代表者
米倉　陽子（YONEKURA YOKO）
奈良教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：20403313

研究成果の概要（和文）：節連結機能を持つ日本語「ば」，引用節を導入する日本語「みたいな」および日英語の可能表現の分析を中心に，「節と節にまたがる文法化」「補部節導入形式の文法化」の考察を行った。その結果，文法化には話し手と聞き手との相互作用が大きな影響を及ぼすことがわかった(間主観化)。また，人間のコミュニケーションの本質が文法化に及ぼす影響に加え，文法化には語彙的意味が主導する段階と構文的意味が主導する段階があるのではないかと仮説を立て，これを検証すべく，ケーススタディとして英語受動構文の発達を分析した。

研究成果の概要（英文）：In this funded research I have studied the grammaticalizations of the Japanese conditional final-particle -*ba* and the simile-origin quotation markers in English and Japanese. Analyses of these items bring to light some aspects of subjectification, i.e. the process whereby the speaker comes to express his mental attitude toward the proposition, and intersubjectification, i.e. specific discourse strategies between the speaker and the hearer which can drive grammaticalization. To take the work a step farther, I have also made a hypothesis that grammaticalization can consist mainly of two stages: a verb-driven stage and a construction-driven stage. On the basis of the hypothesis, I have re-examined the grammaticalization of the English recipient passive construction, i.e. the passive construction in which an indirect object is promoted to the subject position and receives the nominative case.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	６００，０００	１８０，０００	７８０，０００
２００９年度	８００，０００	２４０，０００	１，０４０，０００
２０１０年度	６００，０００	１８０，０００	７８０，０００
年度			
年度			
総　計	２，０００，０００	６００，０００	２，６００，０００

研究分野：英語学
科研費の分科・細目：言語学・英語学
キーワード：文法化，主観化，間主観化，構文

１．研究開始当初の背景

本研究代表者はこれまでに(1)関係代名詞の文法化，(2)tough 形容詞を含む構文(特に tough 構文)の発達，(3)again および over の中英語期・近代英語期におけるアスペクト的副詞成立過程についての分析を行い，学術論文あるいは学会における研究発表という形でその成果を発表してきた。

理論的枠組みとしては一貫して認知文法を採用してきたが，言語知識のあり方を考える際に，主として話し手の頭の中の状態のみに注意を向けて分析を行ってきており，言語コミュニケーションの向こうにいる他者との相互作用が文法化に及ぼす影響については，ともすれば見落としがちであった。

以上の反省を踏まえ，本研究代表者は 2007 年度に発表した 2 本の学術論文において，関係代名詞節の発達に見られる非制限用法から制限用法へという変化を考察し，この文法化パスを形成する要因の一つに，「話し手の聞き手に対する配慮」という，間主観性強化に向かう動きの存在が絡んでいることを主張した。

しかし，国内外の状況を見ても，聞き手の役割に注目して文法化と主観化の関係を分析した先行研究はまだまだ十分とはいえない。コミュニケーションのメカニズムを意識した文法化理論の発展には，一層の事例研究が必要であると判断し，その研究遂行のための科研申請を行った。

２．研究の目的

人間の言語コミュニケーションにおいては，話し手は聞き手に何かを伝達する意図を持って言語を使用する。したがって，ある言語形式が話し手の視点や信念を伝える方向へ発達するのは十分予測できる事態である(主観化)。

それに加えて，コミュニケーションの場においては，聞き手は話し手の発話が向かう対象であると同時に，話し手の発話を制約し，方向付ける存在でもある。しかるに，ある言語形式が聞き手を顧慮するような用法を獲得する方向（間主観化）へと向かうことは，極めて自然な流れであると言えよう。

本研究では，話し手と聞き手の関わりという，人間の言語使用の根底に流れる普遍的な原理がどのように文法化に影響を及ぼすのかという問題に焦点をおきながら，主観化および間主観化と文法化の関係を解明するためのケーススタディを行う。具体的には節連結機能を持つ日本語「ば」および引用節を導入する日本語直喩表現「みたいな」とそれに対応する英語表現 like を分析対象としてとりあげる。

また，語彙項目そのものの語彙的意味と，それよりもスキーマ化が進んでいると考えられる構文的意味が文法化に及ぼす影響についても，考察を行う。具体的には英語受動態，とりわけ受益者受動成立の問題をとりあげる。

以上の分析を通じて，主観化，間主観化，文法化プロセスのさらなる解明に向けて，できるだけ多くの問題提起ができればよいと考えている。

３．研究の方法

既決定性の有無およびそこから派生する「共通参与者項の有無」という観点から見ると，はじめは共通の主語を取れなかった「ば」は，次第に節結合機能を高めた結果，ついに共通の主語項を持つことが可能になったと説明できる。この変化方向は parataxis > hypotaxis > subordination というよく知られたクラインと矛盾するものではないように見える。しかし節間の統合度を決定する要因は共通参与者項の存在以外にもあるし，統合度強化と文法化の問題はそう単純なものではない。

この問題を解明するには，数多くの具体例にあたることが何より必要である。本研究代表者は先行研究に挙げられている例文を吟味するとともに，日本語古典文献に目を通し，「ば」の実際例を採取することから研究を始めた。また同時に，日本語直喩(simile)由来引用導入句分析のためのデータ採取も併せて行った。

続いて比較対照のために相当する英語表現の採取を行ったが，その際には先行研究にあげられている例に目を通すと同時に，オンラインコーパスを利用して，研究の効率化を図った。同様の手法は，英語受益者受動構文分析のための例採取の際にも採用した。

４．研究成果

本研究の研究成果は主に 2 つに分類できる。すなわち，(1) 研究 2 年目終了までに手掛けた主観化・間主観化と文法化に関する知見と，(2) 研究 3 年目に手掛けた構文の意味・動詞の意味と文法化の関係に関する知見である。

まず(1)について述べる。接続助詞「ば」の発達に関する分析で得られた成果は，情報伝達の効率性と主観化・間主観化の関わりについての理解の深化である。より具体的にいうと，接続助詞「ば」の発達では，その拡張のプロセスが情報伝達の効率性を低下させているようにみえることがある。しかしこれは，主観化・間主観化の強化に他ならないことを示した。加えて，認知主体間(話し手と聞き手)

での解釈に関わるコミットメントの強弱が，日本語における接続助詞の「言いさし」用法の多様性に説明を与えていることを指摘した。また，節と節との結合度が強化されるとする一方向性仮説について，従来の文法化研究が残してきた結果とは相容れない例があることを確認している。その上で，節間の結合度の緩みを補う形で主観化および間主観化が進行する，という仮説を提案した。

以上の分析の一部を 2008 年度に執筆した論文(「節間の結合度と文法化---(間)主観性の観点から」 *Osaka Literary Review* 47)で既に発表したが，現在準備中の共著でも取り上げる予定である。共著の出版は監修者や出版社との調整もあり，当初の計画よりも遅れてはいるが，すでに原稿の大部分は書きあがっており，遅くとも数年内に出版の予定である。

次に取り掛かったのは，通言語的に見られる文法化経路の一つである「直喩(simile) > 引用導入」の分析である。具体例として日本語「みたいな(<みたいだ)」の発達を分析した。また比較対象のため，英語の like についてもあわせて考察を行っている。これらの分析を通じて，類似性概念から派生する「厳密な意味での同一性の欠落」が重要な役割を担っていることを指摘した。また，直喩表現由来引用導入句にみられる主観化や間主観化の問題は，「厳密な意味での同一性の欠落」に還元できることを論じた。このような直喩表現の発達は言語の解釈的使用という，人間の一般的言語使用のあり方にその源があることを示した。さらに，コミュニケーション上の調整ツールであるヘッジ・ぼかし表現はブラウン・レビンソン(Brown and Levinson)のポライトネス論でどのように分析されるかを指摘した上で，間主観性の強化という観点からもヘッジ・ぼかし表現を考察する妥当性を提起した。

以上の論考は接続助詞「ば」の分析と同様，現在準備中の共著で発表予定である。

次に，(2)の研究成果について以下に述べる。上記(1)の分析で，人間のコミュニケーションの本質が文法化に及ぼす影響はある程度分かったわけだが，ここで新たな疑問が起こった。すなわち，直喩(simile)概念を表す語彙項目(英語 like，日本語「～みたいな」)は，その語彙的意味だけが引用節導入機能への文法化を推し進めたのだろうか。それとも，これらの語彙項目が被引用句を従えるという構文的特徴が，文法化の主駆動力になったのだろうか。

史的実例を見てみると，発達の初期の段階では「類似性」という，語彙項目が表す意味に依存する形で機能拡張が起こっているように見える例が目立つが，ある程度文法化が進むと，like や「～みたいな」の語彙的意味に頼らない例も散見されるようになる。

語彙的意味から独立した構文の意味が存在するというゴールドバーグ(Goldberg)の構文文法では，語彙(とりわけ動詞)と構文は別次元に属しているように思われる。しかし，ラネカー(Langacker)の使用基盤モデルでは，構文は具体的表現を使用する中からボトムアップ式に抽出される。つまり，動詞と構文は「具体化例とそのスキーマ」という関係にあり，両者の意味に乖離が認められる例こそが，ある構文の発達過程を探るのに重要な洞察を与えてくれる。そこで，文法化には語彙的意味が主導する段階と構文的意味が主導する段階があるのではないかと仮説を立て，これを検証すべく，ケーススタディとして英語受動構文の発達を考察した。その結果，受動態の機能発達では，発達初期段階では構文に現れうる動詞の語彙的意味が主な文法化駆動力となっているが，文法化がある程度進むと，さまざまな意味タイプの動詞が現れるため，動詞の語彙的意味の重要性は相対的に低下し，代わって構文としての意味機能が大きな役割を果たしているとの示唆が得られた。その際，動詞の語彙的意味に頼らない，話者の事態のとらえ方(主観化)も，文法化の重要な要因になっていると考えられる。

構文の意味と動詞の意味の相互作用を視野に入れた本研究の成果については，2011 年度出版の論文(「英語受動態構文の拡張と動詞の語彙的意味について」阪大英文学会叢書 6 『意味と形式のはざま』)において，その成果の一部を発表した。また，研究期間終了直後にはなるが，さらに発展させた形を 2011 年 5 月 22 日北九州市立大学で行われた日本英文学会第 83 回全国大会シンポジウム(テーマ：認知的視点から見た言語変化と共時的多義，発表題目: 「受動態の構文機能的多義の確立と文法化」)で発表し，議論に付している。また，2012 年 2 月発刊予定の論文集にも論考の掲載が予定されており(“Grammaticalization and the Rise of the Recipient Passive in English.” 『内田聖二先生退職記念論文集』)，2011 年 3 月末日にすでに脱稿済である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

①米倉　よう子 (2012 年 2 月刊行予定) “Grammaticalization and the Rise of the Recipient Passive in English.” 『内田聖二先生退職記念論文集』英宝社，査読無。

②米倉　よう子 (2011)「英語受動態構文の拡張と動詞の語彙的意味について」阪大英文学会叢書 6　『意味と形式のはざま』139-150, 英宝社，査読無。

③米倉　よう子 (2008) 「節間の結合度と文法化---(間)主観性の観点から」 *Osaka Literary Review* 47, 1-18,　査読無。

６．研究組織
(1)研究代表者
米倉　陽子（YONEKURA YOKO）
　奈良教育大学・教育学部・准教授
　研究者番号：20403313